

# Marc J. Hershman, Urban Ports and Harbor Management

山 上 徹  
(日本大学)

## 1. はじめに

水辺に広がる陸域と陸域に沿う水面を含め港なり、ウォーターフロントは、古来よりさまざまな形で、人間に影響を与え、とくに都市を生成・発達させ、物・人の移動ばかりでなく、その機能や形態を変化させて文化・技術・情報の往来・出入口として発達してきたのである。

確かに、港は、各種の活動が輻輳しており、かつその時代の経済・社会的要求・要請に対応し、時には国際的存在であり、国家的存在であり、地域的存在であり、個別的・多様な機能を配置する空間である。近年、海運不況下のもとに港の経済性が問題となり、とくに多くの港湾都市において伝統的な海運による波及効果が低下してきている。また在来からの漁業、港運、造船等のように海運関係産業は、かなり競争が厳しい環境にあるにしても、既存事業を活性化させたり、新規事業への参入を考慮せねばならない重要な時期にある。つまり従来からの物流活動の空間、臨海型の産業活動の空間としてだけでなく、さらに水辺に対する関心も高まって、都市活動空間として総合的機能を配置するべく認識が高まり、多様な機能を配慮する必要性が高まっている。物流空間、産業活動空間、さらに都市機能の配置により、たとえば今日、単に環境汚染の解決だけでなく、自然と調和しながら海岸線には、ショッピング、散歩、食事を楽しむための魅力ある都市空間を形成するような努力がなされてきている。とくにリゾート空間として都市のウォーターフロントが再評価されてきており、各種のイベント空間が形成され、集客力のある場となっている。

港なり、ウォーターフロント問題を研究対象としている本書は、とくに2つの部門からの問題意識がなされている。明らかに目に見える社会資本のストーリーと、目に見えない不鮮明な行政機関の介入に関する問題が考えられる。つまりその焦点は、近年、米国の河川、湖、湾、河口、海岸のフロントにある数百万人の都市や町の住民が再評価している都市の港とウォーターフロントにある。ドックの建設や貨物の荷役、船舶の停泊、ウォーターフロント監督機関としての諸活動は、港の公的機関、準独立所有、公共関係機関による行政機関が実施しているが、行政の介入がどのようになっているか、都市の港における経営について公営港の役割についても論じられている。

とくに本書は、次のような港湾都市と港の経営問題について4部門、14章から編集されている。

## 2. 本書の目次と概要

本書は、1970年代と1980年代において近代港に発生した変化、またこのような変化への対応策に関する公共埠頭の主要な役割を究明しようとするものである。その焦点は、近代港や公共埠頭のあり方を解明することが目標にあり、そして現代的諸問題を考察することにある。ここで、本書の目次の構成と若干の要旨について述べてみることにしよう。

第一部 概観	第7章 経済開発の促進
第1章 港の経営	第8章 漁港
第二部 セティング	第9章 小型船用マリナー
第2章 歴史的港	第10章 港の財政と運営
第3章 港のコミュニティ	第四部 その課題
第4章 自然的な港湾	第11章 戦略的計画
第5章 連邦港の政策	第12章 ミチゲーション
第三部 多様な活動	第13章 ウォーターフロントの再活性化
第6章 コンテナ化のストーリー	第14章 公営港の責務

第一部では、港の経営のコンセプトについて考察し、また米国の港の公共機関の特徴について論じられている。港における経済・社会現象は、複雑・多岐な事象が入り込んでおり、単に交通の通路、結節点としての交通サービスの側面だけでなく、港を中核とする広範複雑をきわめる経済事象からなりたっている。とくに都市の発展または地域の開発に重大な役割を果たす諸々の「生産の場」としての機能や性格を持つ、いわゆる混合経済となっており、そのような中で、公共埠頭の役割、使命について概要を論じている。

第二部では、港の開発が実施されてきた歴史的立地の変遷をはじめ、組織、施設、法的問題について述べられ、近年、そのような状況がどのように変化し、公共埠頭の役割がどのように評価されているかが論じられている。

第2章では、米国ポートオーソリティを中心とした公共埠頭の歴史的考察を試みながら、多様な港の機能の変化について論じている。第3章においては、港の特徴と公共/民間の接点を鮮明化することを目的として論じられている。第4章では、港(port)と湾(harbor)の定義をし、その相違を述べている。湾の特徴とその陸域の開発傾向を示唆し、地域的観点からその開発の必要が述べられている。第5章では、米国の港の管理主体の形態は、公的な機関によるものと私的な機関によるものとに分け

られる。公的な機関といっても、①地方行政機関の一部局、②独立港湾委員会、③公企業の3つに分類されている。いずれも州や市政府により設立されたものであるが、経営内容がかなり異なるものとなっている。基本的には、独立の経営主体のもとに運営され、投下資本の回収が前提となり、多角経営がなされている場合が多いが、本書では、わが国の港の開発は、地域経済開発の目的からなされている特質に関しても論じられている。

第三部では、公共埠頭の歴史的役割と財源の問題に関して、荷役、漁業、船遊び、経済開発における役割や財政について論じられている。

第6章では、米国の初期の港の開発主体は、貿易商、海運業者、鉄道業者などの民間業者によって展開されていたが、第一次世界大戦後になり、港の大規模な開発を推進するためにも、資金調達、法制により土地の確保などの問題が生じて公的な機関による管理主体が設立されたのである。さらに1960年代頃から定期貨物船の分野において出現したコンテナ輸送が急速に普及した。船社は、積載率・回転率の向上を目指して競争力を高めることが必要となってきた。本章では、米国におけるコンテナ埠頭の競争実態を概述し、その輸送モードの変化の激しいことを述べている。コンテナ船の運航形態は、今や洋の東西をとわず、世界の海運界に共通した交通手段となっている。とくに国際複合一貫輸送により、広範囲な地域が同一の競争市場範囲となり、港の盛衰には、どのように船社なり、貨物を集貨するかが重要なこととなっている。このような海運技術の変化に対して、コンテナ埠頭の建設には大規模な投資が必要不可欠なことになる。米国の港自体の繁栄には、財政的自立が前提となっており、コンテナ関連施設の膨大な投下資本の回収が必要となるが、その効率的運営を考えねばならず、そのメカニズムについて論じられている。第7章では、港の経済開発の促進策として重化学工業や物流分野から第3次産業の立地による都市機能の配置により活性化の事例を紹介するものである。第8章では、漁港について論じられ、港湾都市として栄えたサンフランシスコであったが、逆にコンテナ化が遅れ、オークランドが優位な立場となったが、シーフードレストランなどによるフィッシャーマンズワーフにより観光名所として活性化した事例を示している。また米国人が魚貝類を嗜好するようになってきていることなども分析されている。第9章では、マリリゾートの開発に関連し、マリナーをはじめとする保管施設の整備問題や安全対策、さらにマリリゾートの開発や経営についても論じている。第10章では、港湾財政と運営について論じ、港の収益と補助金の増加方法に関して述べている。また鉄道と遊覧船の活性化策を提起している。

第四部では、長期的展望が論じられ、とくに港の経営や管理、つまり計画、環境保全、再活性化策、責任などに関する戦略的な選択肢が論じられている。

とくに第12章では、生態的次元を問題として環境保全に留意し、貴重な自然海浜、

保安林などの積極的な活用により、港のアメニティの向上を考慮しなければならないとしている。とくにミチゲーション・コンセプトを紹介し、従来からの経済的な人への補償対策だけを考えるのではなく、自然環境を最重視して、事後的にも生態系の繁殖をも配慮する自然との調和による開発のあり方が提起されている。第13章では、ウォーターフロントの再活性化策が論じられ、港が過去に占めている空間的位置の変化が指摘され、都心のウォーターフロントが再度、都市活動の貴重な空間と認識するための開発のあり方、とくに公共埠頭地区の老朽化した旧港の空間を再開発し、都市機能を配置することの必要性について論じられている。第14章では、米国の港の経営は、戦後わが国の港湾法の立法精神とされたのであったが、たとえば非営利性、非政治性、財政的独立性の三大原則が確立しており、総合的な各種の多角経営形態を営んでいる。そのような公営港のポート・オーソリティの社会的責任に関連し、湾の保護と開発規制に関しても論じられている。

### 3. おわりに

本書は港に関する経済的問題ばかりでなく、総合的視点から港の開発のあり方を共通の問題意識のもとに論じられている。本書の構成は、12名の学者が執筆された個別的研究のもとに編集されている。論述方法については論文ばかりでなく、かなりその内容も異なり読者になじみやすく解説されたものが多い。その専門の分野別では、目次から判断されるように地理、経営、法律、政策、海上交通からの多岐なアプローチで構成されている。とくに港湾を共通の問題意識として港の経営、海域と陸域の活用なり、環境保全問題までも論じるものである。

近年、港の活性化の多くは、米国の都市のアメニティを新たに創造するものとなっている。本書は、このウォーターフロントという特殊な空間で、その多様な価値を保有している空間の最適な開発に当たり、警鐘を含め有用な情報を提供することを目的として編集されている。政策担当者や利害関係者にとり、港の役割なり、変化がどのようにになっているか、また具体的な開発策を提起するため、その先取的な事例を認識するのに本書が適切なものといえる。つまり今日、わが国のウォーターフロントの開発構想が各所で提案されてきているが、本書は、自然の摂理と調和を図りつつ、新たな望ましい活動空間として港の経営なり、ウォーターフロント開発のあり方を模索するための貴重な指針を提供するものとなるであろう。関係各位にとっては、一読に値する良書であるといえよう。

(Taylor & Francis. New York 1988)